



# 「都会での生活」より 「美郷での暮らし」

地元を「知り直す」ことから始まった、  
故郷への恩返しと挑戦

高橋 錬太郎

(美郷町地域おこし協力隊)

## 1 都会での日々と、心の奥にあった故郷への想い

私は高校を卒業した後、夢と期待を胸に関東へと行きました。都会での生活は刺激に溢れ、良くも悪くも多種多様な経験を積むことができました。仕事にも全力で取り組み、充実した毎日を送っていたことは間違いありません。しかし、その華やかな生活の裏側では、常に生活費や将来への不安がつきまとっていました。

関東は給料こそ高いものの、家賃や食費などの物価も高く、手元に残るお金は決して多くありませんでした。少しでも生活を豊かにしたい、稼ぎたいという思いが強かった私は、現場仕事を掛け持ちし、休みを返上して働くことが当たり前前の日常になっていました。まさに「貧乏暇なし」という言葉を地で行くような生活だったと思います。

たまの休日も、職場の先輩や取引先の方々との飲み会、ゴルフといったお付き合いが優先され、自分一人の時間を確保することは困難でした。そうした日々の疲れやストレスの反動で買い物をしてしまうなど、浪費をする時期もありました。

そんな生活を数年続けるうちに、私は自分の生き方を見つめ直すようになりました。「都会の騒がしさから離れて、自然に囲まれた静かな地元で、もっと心穏やかに暮らしたい」。この思いは、最初は単なる憧れでしたが、日が経つにつれて確信へと変わっていきました。

この本音を、同じ秋田出身の友人に打ち明けたところ、彼も全く同じ思いを抱いていました。友人から、東京の中央区京橋にある「アキタコアベース（秋田県あきた暮らし・交流拠点センター）」を紹介され、今の状況について相談するのにちょうどいいと教えられたので、一緒に行ってみることにしました。そこで、浜松町で開催される「あきた就職フェア」を紹介されました。

会場には秋田県内の各市町村から多くの企業が出展しており、活気に満ちていました。そこで偶然見つけたのが、私の地元である美郷町の相談ブースでした。そこで初めて「地域おこし協力隊」という制度を知ったのです。

当時の募集内容は、美郷町の自然環境を活かした「アウトドアコーディネーター」として地域を盛り上げるというものでした。私は昔からキャンプや登山、釣りが好きでしたので、この仕事ならこれまでの経験を活かせるかもしれない、と強く心に響きました。こうして私は、7年間の関東での生活に区切りをつけて美郷町へ戻る決意をしました。

## 2 美郷町地域おこし協力隊としての新たな一歩

7年ぶりに戻った美郷町は、空気の清々しさや人の温かさが以前と変わらず、私を優しく迎え入れてくれました。私の任務は、アウトドア活動を通じて町を盛り上げることです。

具体的な活動内容は多岐にわたりますが、1年目の活動の中心となったのは、SNSや町の広報誌を通じた情報発信です。町内にあるキャンプ場やスノートレッキングの魅力など、季節ごとの催し物の情報を、写真や文章で伝わりやすくなるよう意識して紹介していきました。また、自分自身で企画を立てるだけでなく、町や商工会などが開催する行事にも積極的に参加し、運営を手伝うことで、内側から地域を盛り上げる努力を続けました。

しかし、着任当初は戸惑うことも少なくありませんでした。趣味として楽しむアウトドアと、仕事として提供するアウトドアには大きな違いがあったからです。美郷町の魅力をどうすればより多くの方に届けられるのか、試行錯誤の日々が始まりました。

### 3 地道な調査と、住民の方々との触れ合いから学んだこと

アウトドアが好きだという気持ちはありましたが、自分一人で催し物を企画・開催した経験は一度もありませんでした。最初は何から手をつければ良いのか分からず、大きな不安がありました。そこで私は、「今の秋田県で求められているものは何か」を正確に知ることから始めようと考えました。

まず、インターネットやSNSを使い、県内のアウトドアに対する関心や人気のある内容を徹底的に調べました。ある程度の方向性を定めた後、その調査結果が本当に正しいのかを確かめるために、現地でのアンケート調査を行うことにしました。

調査にあたっては、町の第三セクターである「あきた美郷づくり株式会社」の皆さんに協力をいただき、同社が管理している道の駅やスキー場など、人が集まる場所へ足を運び、直接声

を聞くことにしました。

最初は、簡単に意見が集まるだろうと楽観視していましたが、実際に始めてみると、現実はその甘くありません。歩く方々に声をかけても、なかなか足を止めてはもらえません。アンケート調査がこれほど難しいことだとは、思いもしませんでした。

そこで、アンケートの質問項目を見直し、できるだけ短時間で答えやすく、かつ意味のある情報を得られるように工夫を凝らしました。アンケート自体は簡単なものに留め、回答を書いている間に、口頭でさらに詳しい要望を伺う。この対話の積み重ねによって、ようやく満足のいく調査結果を集めることができました。その苦労のおかげか、その後はやりたかったデイキャンプのイベントを自主開催し、無事終えることができました。この経験は、単に情報を集めるだけでなく、地域の方々が何を求めているのかを肌で感じる貴重な機会となりました。



(デイキャンプ)

### 4 故郷を「知り直す」ことの大切さ

地域おこし協力隊として活動する上で、私が常に意識していたことがあります。それは、たとえ直接的な業務とは関係がなくても、地域の行事には自分から積極的に参加するということです。

地元を7年間も離れていると、昔の記憶とは

違う新しい町の姿が見えてきます。例えば、誰かに町の魅力を紹介する時に、古い情報しか持っていなかったら、正確な魅力を伝えることはできません。私は「一から地元のことを知り直す」つもりで、様々な集まりに顔を出すようにしました。

最初はお互いに少し距離があったかもしれませんが、何度も顔を合わせ、一緒に汗を流すうちに、地域の方々との交流が深まっていきました。私の名前や活動内容を覚えてくださる方も増え、新聞やインターネットの記事などを通じて、美郷町の特徴を広く知ってもらう機会も増えていきました。

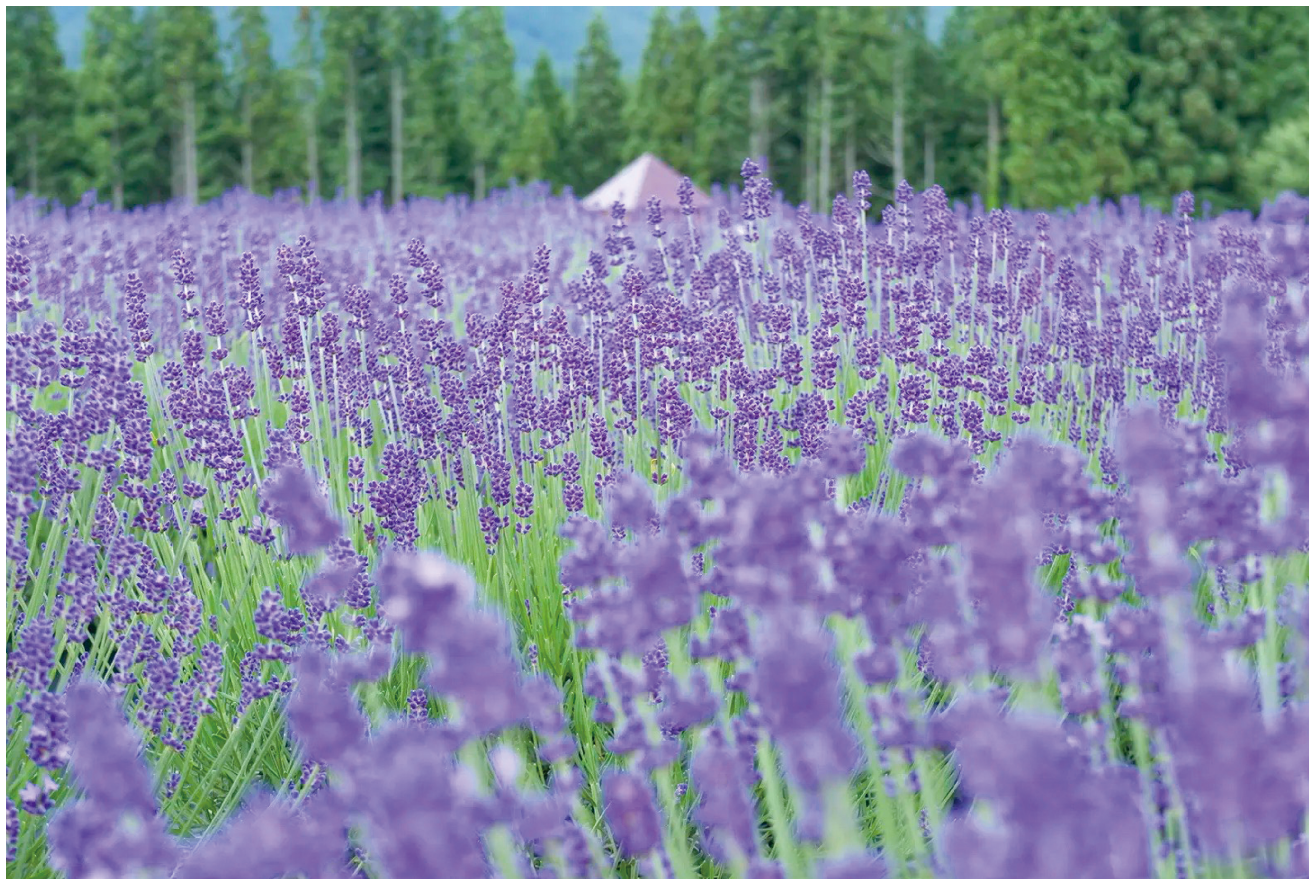
この「地域に溶け込む」という過程が、協力隊としての活動において大切であり、また嬉しい変化だったと感じています。

## 5 ラベンダーを通じた一期一会

これまで参加した行事の中でも、特に心に残っているのが「ラベンダーまつり」です。美郷町の大台野広場にあるラベンダー園で、毎年開花の時期に合わせて6月頃開催され、約二万株もの紫と白のラベンダーが咲き誇ります。風に乗って辺り一面に漂う清々しい香りは、訪れる人々の心を穏やかにしてくれます。

私は昨年、この期間中に摘み取り体験の案内係としてお手伝いをさせていただきました。園内の東屋で来園者をお迎えする中で、日本各地のラベンダー園を巡っているという熱心なファンの方や、静かな早朝を狙って素晴らしい写真を撮りに来られる方など、多くの方々とお話しすることができました。

お客様からは、「摘み取ったラベンダーはどうすれば長持ちするの?」「家でどんな風を楽しめばいいの?」といった質問をよく受けました。



(ラベンダーまつり)

私は、吊るしてドライフラワーにする方法や、小さな袋に詰めて香り袋（サシェ）にする楽しみ方をお勧めしました。また、私自身の個人的な楽しみ方ですが、「ポプリキャンドル」という、溶かしたろうソクにラベンダーを閉じ込めて作るキャンドルがありまして、意外と簡単に作れて楽しいのでオススメです。

単に案内するだけでなく、来場者の体験談などストーリーを聞いて知見を深める時間は、私にとっても楽しいひとときでした。

## 6 舞台の上で見つけた、新しい自分と地域の絆

毎年10月に開催される「美郷フェスタ」というイベントがあり、そこで私は「町びと劇団ゼンマイ座」の舞台に出演させてもらうことになりました。

きっかけは、日頃からお世話になっている「あきた美郷づくり株式会社」の社長からのお誘いでした。その時の脚本を社長が書いて、「高橋君も出てみないか」と声をかけてくれたのです。

芝居をするのは小学校のお遊戯会以来でしたので、セリフを覚えられるのか、本番で失敗しないか、不安で仕方がありませんでした。稽古には、学生から年配の方まで、幅広い年齢層の有志の方々が集まっていました。皆さんと一緒に練習を重ねる中で、次第に緊張がほぐれ、公演が終わる頃にはとても大きな達成感を味わえました。

2年目も声をかけてもらい、再度出演させてもらう機会を得ました。本番中は自分の心臓の音が聞こえるほど緊張しましたが、舞台仲間の支えのおかげで無事に演じることができました。練習の大変さや本番のプレッシャーが大きかった分、幕が下りた時の達成感は一瞬忘れられないものになりました。

この経験を通じて、新しいことに挑戦する素晴らしさを再確認するとともに、多くの方に私の顔を覚えていただくことができました。舞台の上から見た客席の景色と、温かい拍手は、地域の一員として認められたような気がして、胸が熱くなりました。



(町びと劇団ゼンマイ座)

## 7 これからの歩みと、美郷町への感謝

地域おこし協力隊として着任してから、早いもので3年目を迎えました。

この3年間、アウトドアコーディネーターという仕事を通じて、数え切れないほどの出会いと学びがありました。

最初は自分のことで精一杯でしたが、今では「どうすれば美郷町をもっと良くできるか」「どうすればこの素晴らしい自然の魅力を伝えられるか」ということを、自分の事として考えられるようになりました。

協力隊の任期が終わった後も、私は美郷町に恩返しとして貢献をしていきたいと考えています。

これまで培ってきた経験や人との繋がりを活かし、美郷町の魅力を発信し続けるとともに、観光の活性化や地元の特産品をより多くの方に知ってもらうための活動に力を尽くしていきたいと考えています。

都会での忙しい日々の中で求めていた「自然に囲まれた場所で、心穏やかな暮らし」を、美郷町は取り戻させてくれました。自然の豊かさと地域の方々の優しさが、私の今の支えとなっています。

## 8 活動を振り返って

地域おこし協力隊という挑戦は、私にとって人生の大きな転換点となりました。最初は自分に何ができるか分からず、手探りの連続でしたが、一歩踏み出し、地域の方々と対話を重ねることで、道は開けていきました。

現在、秋田県内各地では、豊かな自然資本を活用したキャンプや登山、水辺のアクティビティなど、アウトドアイベントの種類や機会が増えているように感じます。こうした中で、今よりも美郷町に注目してもらえよう、これからもアウトドアを通じてたくさんの方に魅力を伝えていきたいと思っています。

最後になりますが、これまで私の活動を温かく見守り、支えてくださった町民の皆様、美郷町役場やあきた美郷づくり株式会社の皆様、そして活動を共にしてくれた方に心から感謝を申し上げます。これからも初心を忘れることなく、故郷のために精一杯取り組んでまいります。

### <担当者から一言>

美郷町で初めての地域おこし協力隊として活動してから2年の歳月は、自身が担当する業務を模索しながら活動を計画し、自ら企画したイベントの開催や町内の情報を移住者目線で発信することに努めてくれました。

また、町内でのイベント等にも積極的に参加して、地域の方、来場したお客様との交流や情報交換を行ってきました。

年々人口減少が続く中で、私自身も美郷町の良さを知ってもらい、関係人口の創出や移住定住につながる活動ができるよう、今後も地域おこし協力隊と共に、活動を通して地域づくりを図っていきたいと思います。

今年が二人にとって任期の最後の一年になりますので、自身の活動とともにこれまでの活動をまとめていただき、次の協力隊へ引き継がれることを願っております。

また、二人の今後の進路の実現に向けて、できる限りサポートしていきたいと思っています。

(美郷町商工観光交流課

商工観光交流班長 鈴木 紀和)